

第30回夏期福音特別集会(2)(伊東)

根と芽

――イザヤ書第9章8節～12章6節――

1983年7月23日

小池辰雄

狂えるもの 神の懲らしめ エホバの怒り わが怒りの杖 大コンダクターは神さま 遣れるものは神に帰るべし その上にエホバの霊とどまらん 知の霊 知と愛とは一つ キリストの霊が臨む 終末の最後の神の国 一如的な知 主エホバはわが力わが歌なり キリストは無限無量 根っこから芽

【イザヤ9】

8 主^{ついで}一言をヤコブにおくり、之をイスラエルの上にのぞませ給えり。9 すべてのこの民エフライムとサマリヤに居るものとは知るならん。かれらは高ぶり誇る心をもていう。……¹²前にアラム人あり後にペシリテ人あり。口をはりてイスラエルを呑^のまん^のとす。然はあれどエホバの怒りやまずして尚その手をのばしたもう。

¹³然どこの民はおのれをうつものに帰らず万軍のエホバを求めず。¹⁴斯るゆえにエホバ一日のうちに首^{かしら}と尾^{しゅう}と櫻欄^{えいらん}のえだと韋^{あし}とをイスラエルより断切たまわん。¹⁵その首とは老たるもの尊きもの、その尾とはいつわりをのぶる預言者をいうなり。¹⁶この民をみちびく者はこれを迷わせ、その引導^{みちびき}をうくる者はほろぶるなり。¹⁷このゆえに主はその少壮者^{わかきもの}をよろこびたまわず、その孤児^{みなしこ}と寡婦^{やもめ}とを憐^{あは}れ^れみたまわざるべし。是その民はことごとく邪^{よこし}まなり悪をおこなう者なり。おのおのの口は愚かなる言^{こと}をかたればなり。然はあれどエホバの怒りやまずして尚その手をのばしたもう。

¹⁸悪は火のごとくもえ、棘^{おとぎ}と荊^{くさ}とを食いつくし、茂りあう林をやくべければ、みな煙となりむらがりて上^{たち}騰^{のぼ}らん。¹⁹万軍のエホバの怒りによりて地はくろく焼け、その民は火のもえくさとなり、人々たがい^{たが}いに相憐^{あは}れ^れむことなし。²⁰人みぎに攫^{つか}めどもなお飢え、ひだりに食らえども尚あかず、おのおのその腕の肉をくらうべし。……

【イザヤ10】

……⁴ただ縛^いめ^{まし}られたるものの下にかがみ、殺^{ころ}されたるもの^ふのした^{した}に伏^ふ仕^{した}れんのみ。然はあれどエホバのいかり止まずして尚その手をのばしたもう。



5 咄アツスリヤ人、なんじはわが怒りの杖なり。その手の笞はわが忿怒なり。
6 われ彼をつかわして邪曲なる国をせめ、我かれに命じて我がいかれる民を
せめて、その所有をかすめ、その財宝をうばわしめ、かれらを街の泥のごと
くに蹂躪らしめん。7 されどアツスリヤ人のころざしは斯のごとくならず、
その心の念もまた斯のごとくならず、そのころは敗壞をこのみあまたの国
をほろぼし絶たん。8 かれ云う、わが諸侯はみな王にあらずや。9 カルノはカ
ルケミシの如く、ハマテはアルパデの如く、サマリヤはダマスコの如きにあ
らずや。……12 このゆえに主いたもう、我シオンの山とエルサレムとに為
んとする事をことごとく遂げおわらるとき、我アツスリヤ王のおこれる心の
実とその高ぶり仰ぎたる眼とを罰すべし。13 そは彼いえらく、われ手の力と
智慧とによりて之をなせり。我はかしこし。国々の境をのぞき、その獲たる
ものをうばい、又われは丈夫にしてかの位に坐するものを下したり。14 わが
手もろもろの民のたからを得たりしは巢をとるが如く、また天が下を取收め
たりしは遺しすてたる卵をとりあつむるが如くなりき。……15 斧はこれをも
ちいて伐るものにむかいて己みずから誇ることをせんや。鋸はこれを動か
す者にむかいて己みずから高ぶることをせんや。此はあだかも笞がおのれを
挙ぐるものを動かし、杖みずから木にあらざるものを挙げんとするにひとし。
……

20 その日イスラエルの遺れる者とヤコブの家のがれたる者とは再びおの
れを撃ちし者にたよらず、誠意をもてイスラエルの聖者エホバにたよらん。
21 その遺れるものヤコブの遺れるものは大能の神にかえるべし。22 ああイスラ
エルよ、なんじの民は海の沙のごとしといえども遺りて帰りきたる者はただ
僅少ならん。そは敗壞すでにさだまり義にて溢るべければなり。23 主万軍の
エホバの定めたまえる敗壞はこれを遍く国内におこない給うべし。……

【イザヤ11】

1 エツサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすば
ん。2 その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、
知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。3 かれはエホバを畏るるをもて歡樂
とし、また目みるところによりて審判をなさず、耳きくところによりて断定
をなさず、4 正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて国のうちの卑しき者
のために断定をなし、その口の杖をもて国をうち、その口唇の氣息をもて
悪人をころすべし。5 正義はその腰の帯となり、忠信はその身のおびとなら
ん。

6 おおかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、犢おじし肥



たる家畜^{けだもの}ともに居りて、ちいさき童子^{わらべ}にみちびかれ、⁷牝牛^{めうし}と熊とはくいものを同^{とも}にし、熊の子と牛の子とともにふし、獅^しはうしのごとく藁^{わら}をくらい、⁸乳児^{ちのみこ}は毒蛇^{どくへい}のほらにたわむれ、乳ばなれの児は手をまむしの穴^{あな}にいれん。⁹斯^さてわが聖山^{きよやま}のいずこにても害^{そこな}うことなく、傷^{やいふ}ることなからん。そは水の海をおおえるごとく、エホバをしのの知識地^ちにみつければなり。¹⁰その日エツサイの根たちでもろもろの民の旗となり、もろもろの邦人^{くにびと}はこれに服^{まつろ}きたり、栄光はそのとどまる所にあらん。……¹³またエフライムの猜^{そねみ}はうせ、ユダを悩ますものは断たれ、エフライムはユダをそねまず、ユダはエフライムを悩ますことなかるべし。……¹⁶斯^さてその民ののこれる僅かのものの為にアツスリヤより来るべき一つの大路あり。昔イスラエルがエジプトの地よりいでし時のごとくなるべし。

【イザヤ12】

¹その日なんじ言わん。エホバよ我なんじに感謝すべし。汝^{きみ}さきに我をいかり給^{たま}いしかどその怒りはやみて我をなぐさめたまえり。²視^みよ神はわが救いなり。われ依頼^{よりたのみ}ておそるるところなし。主エホバはわが力^{ちから}わが歌なり。エホバは亦わが救いとなりたまえりと。³此故^{ゆゑ}になんじら欣喜^{よろこび}をもて救いの井より水をくむべし。⁴その日なんじらいわん。エホバに感謝せよ、その名^{みな}をよべ、その行^{みわざ}をもろもろの民の中につたえよ、その名^{みな}のあがむべきことを語りつげよ。⁵エホバを頌^ほめうたえ。そのみわざは高くすぐれたればなり。これを全地につたえよ。⁶シオンに住めるものよ、声をあげてよばわれ、イスラエルの聖者はなんじの中にて大いなればなり。

●狂えるもの

この時間はイザヤ書の9章8節から12章6節までです。

⁸主^{ひと}一言^{ひとこと}をヤコブにおくり、

これは非常に不思議な言葉ですね。「ヤコブ」とは北王国のイスラエルのことで、別な言葉で言っている。

之をイスラエルの上にのぞませ給えり。⁹すべてのこの民エフライムと

「エフライム」もイスラエルのこと。

サマリヤに居るものとは知るならん。

今日は、「知る」という言葉がだいぶ出てくるんですが、旧約で「知る」というのは決してあたまで知ることではない。全存在^{きんざん}的です。「知る」ということを非常に深く言ったのはホセア書なので、ちょっと開いておきましょう。ホセア書9章7節、今日のところとちうど内容的にもマッチしているところですが。



「7 刑罰の日きたり^{むくい}応報の日きたれり。イスラエルこれを知らん。預言者は愚かなるもの、^{うらみ}靈に感じたるものは狂えるものなり。これ汝の悪おおく、汝の怨恨^{うらみ}おおいなるに因る。」(ホセア9:7)

この「愚かなるもの、狂えるもの」という言い方は逆説的な言葉です。これが良寛さんも言った、「大愚」の世界ですね。神の知は大愚にあるんです。

「福音のためには、聖名のためには、我は狂えるものなり」

とパウロは言いました。預言者も使徒もそのような、キリストにおいて烈々たる世界は、これは狂えるごとき世界です。本当はこれが一番本当の道なので、世の中が狂っているんですけれども。今の日本の教育界は、学校の世界はもう狂ってしまっている。

「神の靈に感じたるものは狂えるものなり」

という。エレミヤは、

「私はエホバの言に酔えるものだ。酒に酔うがごとくに私はエホバの言に酔っているんだ」

と。旧約の預言書には親しんでください。旧約は預言者、新約は使徒。エホバの靈、キリストの靈です。

かれらは高ぶり誇る心をもていう。

この「高ぶり誇る心」はもうサタンの手下になっている。傲慢は、靈的傲慢は最大の罪です。

「自分はもう靈的になった」

なんて言っているいい気になったら、知らないまにサタンの靈に切り替わる。本当の靈の世界は、私が言っているこの「無」の世界なんです。聖靈も決して私できません。私したらとんでもないことになる。聖靈を私したら切り替わる。

それは王サウルがそのことを実証してしまった。彼はサムエルに按手されて、神の靈が伝わった。

「あなたは思うがままにやってよろしい」

と。その「思うがままに」の「思う」はあなたの思いではないから、という意味なんだ、サムエルの言うのは。ところが、そのうちに神さまの靈が抜けてしまつて、自分の思うがままになった。そこでダビデに対する妬みを起こした。あれが非常にはつきりわかる。靈的傲慢はそのようになる。

觀念もダメ、利益もダメ、靈的傲慢もダメ。本当の福音の世界はまん中の狭き道なんです。真ん中ですよ、本当の真ん中の狭き道。私はそれを

「黄金中道」

と言いたい。

私は教会からも無教会からも本当に理解されない。知られない。いいんですよ、キリストに知られていれば。



「知られたることくわれ知らん」

と、パウロのコリント前書13章のあの「知る」がまさに旧約の「知る」なんです。あれも全存在的な「知る」です。今は、いわゆる知育偏重で、とんでもない知の世界でもって災いなるかなです。そういう「知る」という字があります。

●神の懲らしめ

12節に、

¹²前にアラム人あり後にペシリテ人あり。口をはりてイスラエルを呑まんとす。然はあれどエホバの怒りやまずして尚その手をのばしたもう。

¹³然どこの民はおのれをうつものに帰らず万軍のエホバを求めず。

この13節は大事な節です。神さまに懲らしめられる。神さまは愛する者を懲らしめたもう。そしたらば、神に帰ればいいのに、横にそれてしまう。

今の教育界をみると、みんなそうですね。先生が正しい角度からちゃんとものを言ううと、生徒はすぐ反抗して先生のところに帰ってこない。親も先生に食いついたりする。まあ本当の意味で狂ってしまっている。

「おのれをうつ」というのは、神さまは本当に助けるために、救うためにうつ。愛の鞭なんです。ちゃんとものを言つて、言うことを聞かなければ、仕方がない。感じさせてやらなければ。

「聞こうと思わないやつは感じなくてはいかん」

というドイツ語の言葉がある。「感じなくてはいかん」というのは、「打たれなくてはいかん」ということです。

マルチン・ルターあたりはそのようにして教育された。先生は左手に教科書を持って、右手に鞭を持っていたという。ラテン語の語尾変化をまちがえると、引っぱたかれるんだ。なにも悪いことをしたからではない。そのかわり、そうやって鍛えられたから、ルターのラテン語はすごいんですよ。ルターの著作の中にたくさんラテン語の文章があるわけです。ルター研究を本格的にしようと思ったら、ラテン語ができなかったらやれない。

神さまは愛をもって打ちたもう。万軍のエホバに帰ってこない、神を求めないという。

「わが心は夜に汝を慕い、^{あした}晨に汝を求める」

という。キリストが、

「求めよ」

と言われた求めです。求めるよりも、与えようとしている神さまの力の方がもちろん大きいんです。だから、「求めよ」と言っておられる。

「必ずやるよ。最大最高のものをやるよ」

と。それは聖霊です。もう聖霊をいただいたら、他に何もいらんです、正直。世界中にこ



れに代えるものはない。それをいい加減にしてね、ただ水のバプテスマなんてやっている。洗礼のヨハネが言ったでしょ。

「私のあとから来る人は私よりかはるかに力あるもので、私はその靴の紐を解くに足らないものだ。私は水でバプテスマをするが、その人は火と霊をもつてバプテスマする人だ」

と。霊的な火をもつてバプテスマする人だと。それを一般のキリスト教界がいい加減にしているから、

「使徒的信仰に戻れ、帰れ」

と私は叫んでいるわけです。

●エホバの怒

14 斯るゆえにエホバ一日のうちに首と尾と椶櫚のえだと葦とをイスラエルよ
り断切たまわん。
たちきり

預言者の言葉は非常に詩的な言葉です。

15 その首とは老たるもの

政治の長老たちです。「老たる」とはただ年取ったという意味ではない。

尊きもの、

貴族階級みたいなもの、

その尾とはいつわりをのぶる預言者をいうなり。

民を惑わしている。

16 この民をみちびく者はこれを迷わせ、その引導をうくる者はほろぶるなり。
みちびき

17 このゆえに主はその少壯者をよろこびたまわず、その孤児と寡婦とを憐み
わかきもの
みなしご
やもめ

たまわざるべし。

「神さまが孤児と寡婦をあわれまない」

なんて、こんな言葉は驚いてしまうでしょ、こんな言葉が出てくるんだから。いつも預言者を通して、

「孤児と寡婦をあわれまざることとは大変なことだ」

と、預言者を通して何回言っているかわからない。ところが、ここでは、それも憐れまざうという。それくらいみんな背いているから、神さまはそれも憐れまなくなってしまった。もうおしまいだ、全部すてられてしまうぞと。恐ろしい言葉です、これは。

はその民はことごとく邪まなり
よこしま

これは今の日本の現状みたいだね。「ことごとく邪まなればなり」と。

「頭の中から足の裏までもうすつかり腐ってしまった」

と、イザヤ書の第1章に出ていたでしょ。そういう極限情況にイスラエル・ユダがなつて



しまった。

日本ももう今はいろんな意味で極限情況だな。滅びはソ連にやられるんじゃない。日本は自ら崩れていく、みずから。本当に日本の国民が素晴らしかったら、それは攻めてきませんよ。侮られるに価するからあなどられる。軍備が足りないからではない。国民精神が腐ってきたから、曲がってきたから。価値判断が全く転倒してしまっているから。

「それその民はことごとく邪まなればなり」

と。預言者の言葉というのはなかなか烈しい。いい加減なことを言ってもしょうがないからね。

悪をおこなう者なり。おのおのの口は愚かなる言をかたればなり。然はあれどエホバの怒りやまずして尚その手をのばしたもう。

このところには、「エホバの怒」というのがたびたび出てくる。19節にも。

18 悪は火のごとくもえ、棘と荊を食いつくし、茂りあう林をやくべければ、みな煙となりむらがりて上騰らん。19 万軍のエホバの怒りによりて地はくろく焼け、その民は火のもえくさとなり、人々たがい相憐むことなし。20 人みぎに攫めどもなお飢え、ひだりに食らえども尚あかず、おのおのその腕の肉をくらうべし。

凄いいね、この言葉は。問題は、エホバの怒りです。エホバの怒りというのは義の表れなんです。ただ感情ではないですよ。エホバの義が踏みにじられているから、その表れがエホバの怒り。怒りは愛の別な表れ方です。本当の愛は怒るんです。愛すればこそ怒っている。いわゆる憎らしいというような怒りではないですよ。これは聖憤、義憤なんです。義の憤り。

「義憤の魂よ、汝を産みたるものは幸いなるかな」

と、ダンテの『神曲』の中にも出てくる。ダンテもまさにこの義憤の魂でした。

もう日本人は悪いことに対しても感覚を失っている。

「ああ、それはまあ普通にあるよ」

なんて、大抵たかをくくってしまおう。「そんなことはあるよ」ではない。

「そんなことはあるべきでない」

とはつきり言えなくてはね。もうそういうように狂ってきってしまったて、

「まあしょうがないよ」

と。そういうのが大体、日本人の感覚になってきた。おそろしいことですね。

「そんなことを憤慨するのは、明治の古い人間だけだ」

なんて。

●わが怒りの杖

10章にいきます。いちいち読みません。こういう悪いことをしているがと、ずっと書き



である。4節に、

4 ただ縛められたるものの下にかがみ、殺されたるもののしたに伏ふせられんのみ。然はあれどエホバのいかり止まずして尚その手をのばしたもう。

と。「その故に」とむしろ言いたいところです。こういうわけだからと。なぜ、「然はあれど」なんて書いたか。

5 咄やよアツスリヤ人、なんじはわが怒りの杖なり。その手の咎しとはわが忿怒いきどおなり。

今度はアツシリヤに対して言っている。「アツシユール」というのはアツシリヤ人の拜んでいる神さまの名前ですが、それから「アツシリヤ」という名がきている。

「アツシリヤよ、私がイスラエルに対する怒りの杖としてお前を使っているんだ」

ということ。お前が決していいのではない。お前がイスラエルをやっつけているのは、お前がいいからではなくて、私のただ手足になっているだけなのであって、それを今度は、

「俺が世界に君臨してやる。イスラエルは悪いやつだ」

と言って、アツシユールが驕り高ぶるから、アツシユールに対してまた神さまの審判が来るわけです。

6 われ彼をつかわして邪曲よこしまなる国をせめ、我かれに命じて我がいかれる民をせめて、その所有もちものをかすめ、その財宝たからをうばわしめ、かれらを街ちまたの泥ひちのごとくに蹂躪ふみにじらしめん。

みんなそれは神さまの審判なので、

「お前がすることを決して手放しでいいなんて言っているのではないんだ」

と。預言者はもうちゃんとそこを見ているわけです。ところが、アツシリヤ人はもう自分の力を誇ってやっているわけだ。列強が、19世紀の終りの帝国主義というのはそいつをやってきた。

7 されどアツスリヤ人のこころざしは斯のごとくならず、その心の念おももまた斯のごとくならず、そのこころは敗壞やぶをこのみあまたの国をほろぼし絶たたん。
8 かれ云う、わが諸侯きみたちはみな王にあらずや。9 カルノはカルケミシの如く、ハマテはアルパデの如く、サマリヤはダマスコの如きにあらずや。

そのようにしてみんな陥落していったではないかと。これは譬えて言っている。これはみんな陥落したところで、それらと同じようなことではないかと。12節、

12 このゆえに主いたもう、我シオンの山とエルサレムとに為なんとする事をことごとく遂げおわらるとき、我アツスリヤ王のおごれる心の実とその高ぶり仰ぎたる眼とを罰すべし。

そうなつたら今度は、罰はアツシリヤに臨んでくるぞというわけです。神に背くのもダメだし、驕るのもダメだと。

13 そは彼いえらく、われ手の力と智慧とによりて之をなせり。



アッシリヤがそう言っている。

我はかしこし。国々の境をのぞき、その獲たるものをうばい、又われは丈夫ますらおにしてかの位に坐するものを下したり。^{おろ}14わが手もろもろの民のたからを得たりしは巢をとるが如く、また天が下を取收めたりしは遺しすてたる卵のことよりあつむるが如くなりき。

なんて言つて、いばつているわけだ。

5斧はこれをもちいて伐るものにむかいて己みずから誇ることをせんや。

これは預言者の言葉で大事な言葉です。

「お前たちは神さまの斧ではないか。それが、斧を使っている神さまに向つて誇り高ぶっているのは何事か」

と。

鋸のこぎりはこれを動かす者にむかいて己みずから高ぶることをせんや。

「鋸が自分で切っているなんて思つたら、とんでもない。神さまによつて切らせられているので、お前の力ではないぞ」

と。そういうことです。

此はあだかも筈しもとがおのれを挙ぐるものを動かし、杖みずから木にあらざるものを挙げんとするにひとし。

そんなバカげた話はないじゃないかと。おもしろいね、この預言者の言葉は。

●大コンダクターは神さま

そうでなくて、自分で手放しでやっていると思っている。子どもは親にいろいろ面倒みていただいて大きくなったのに、自分でひとりで大きくなったような顔して、感謝の念がない。これと同じことだ。そしてすぐ親に、

「なんだ!？」

なんて言つてくつてかかったりする。ヘタすれば殺したりする。また、先生に向かつて、中学生が先生をなぐつたり。殴られた先生の方が恐縮したりしている。冗談じゃないよ。全く狂っている。校長が意気地のないことを言っているのは、私はもう癪しやくにさわるよ、あんなのを見ていると。何事かと言いたくなる。

あの「おちこぼれ」なんていう言葉は、私は大嫌いだ。「おちこぼれ」なんてものは全然いないですよ。神さまはみんな一人びとりを天下、一品につくつていいる。数学ができなかったっていいよ。手仕事があまければ、手仕事の方に弟子入りしてやっていけばいい。なに大学に入る必要はない。みんな、神さまはそういうように、大きな大調和をなすように一人びとりをつくつていいるんだ。決して一元的に、また類型的に、全体主義的にはしてない。だから、私はあの音楽のコンダクター(指揮者)のことをすぐ思う。たくさん楽器の音



を聞いているでしょ。そして、どこかがちよつとまちがうと、すぐ感じて、全体の本当の調和のためにそれを直していくでしょ。大コンダクターは神さまですから、キリストですから。それを太鼓が笛みたいな音をたてたらどういふことになるか(笑)。

そういう考え方が、日本人は非常に今は欠けているね。なんでも有名校だとか、なんとかかんとかと。本当の意味で、人物教育をしなければダメです。今はもう人物がほとんど出てこない。人物教育をするためには、先生が人物でなければダメなんです。いかなる制度でもない。からだで伝わっていくようなことでなくては。

そういう狂っている中で、しかし、皆さんは一人びとりが一騎当千で、

「百万人といえども我ゆかん」

と孔子が言ったが、そのような一人びとりになれば――成りつつあるが――何をかおそれん。詩篇27篇と同じ。

今の15節は非常におもしろい節です。忘れられないような表現をしているから。いわゆる下克上だ。

● 遺れるものは神に帰るべし

その次、20節。

²⁰その日イスラエルの遺れる者と

前の章からよく出てきますね、

「遺れる者」「シエアル」

という。イスラエルの「シエアル」と、

ヤコブの家ののがれたる者とは再びおのれを撃ちし者にたよらず、

たよればいいのに。小さな子どもでもそうですよ。「おかあちゃん」と言つて、たたかれながらもおかあちゃんに戻ってくる子どもは、本当におかあさんの他に行くところはないんだよ。ところが、少し大きくなると、行くところがいろいろできてしまうものだから困る。だから、キリストが、

「幼児のごとくならずば天国に入れない」

と言われた。帰るところに帰らないとダメだと。

誠意^{まじこころ}をもてイスラエルの聖者エホバにたよらん。

それは、遺れる者と神さまを避所として逃れる者は帰ってくる。聖者に頼る。

²¹その遺れるものヤコブの遺れるものは大能の神にかえるべし。²²ああイスラエルよ、なんじの民は海の沙のごとしといえども遺りて帰りきたる者はただ

僅少^{わずか}ならん。

キリストに遺りて帰りきたるところのクリスチャンはなんと少ないか。「キリスト、キリスト」なんて言つたつて、一向、観念でダメだと。だから、私は、



「エン・クリスト」(キリストの中に)

という、ああいう表題を付けざるをえなかったんです。「キリストの中に」という現実。信仰ではない。中にいることが信の現実だと。

「これから信じよう。あしたこうなるだろう」

なんていう世界ではなく、

「現実にそうである」

という世界です。「しんこう」と書きたければ、信じ交わる、「信交」と書いてください。霊的な交わりの世界だから。

それは敗壞^{ほろび}すでにさだまり、義にて溢るべければなり。

神さまの義が溢れている。

²³主万軍のエホバの定めたまえる敗壞^{ほろび}はこれを遍^{あまね}く国内におこない給うべし。

そうして正直、イスラエルもユダもみんな神さまの審判を受けて滅びた。アッシリヤを通して滅ばされ、バビロニヤを通して滅ばされ、捕囚され、それでもなお神さまは棄てない。そこが第二イザヤ、第三イザヤなんです。

さっきの10章20、21、22節は大事な節です。我々はその

「遭れる者」「逃れたる者」「帰りゆく者」

です。それでいい気になっているのではない。「そのようであれ」と言つて、身をもつて証することです。

●その上にエホバの霊とどまらん

次は11章です。ここは大変なところで、聖書の最も大事なところの1か所です。「エッサイ」というのはダビデの父です。

¹エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。

「枝」というよりかむしろ、小さな芽生えです。

²その上にエホバの霊とどまらん。

「とどまらん」ということに気をつけてください。ヨハネ伝15章にも、

「とどまれ、とどまれ。わがうちに居れ、居れ」

とキリストが言われた。あれと同じ字です。

イザヤ書61章に、

「主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏^{あぶら}をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者^{いた}をいやし、^{とらわれびと}俘囚^{いまし}にゆるしをつげ縛められたるものに解放^{ときほなち}をつげ、」(イザヤ61・1)

とある。「霊」と「膏^{あぶら}」という。「霊」と同じことを「膏」と言っている。



「膏そそがれたる者」とは、

「霊そそがれたる者」「メシヤ」「マーシアツハ」「キリスト者」

です。「キリスト者」というものは「膏そそがれたる者」という意味なんだ。ところが、聖霊を受けてないクリスチャンがたくさん、レッテル・クリスチャンがいっぱいいるわけだ。私もかつて永いことそうだった。

それが私は1950年の秋に阿蘇の垂玉で集会をやっていた時に、聖霊が上からやって来てしまった。いやあおったまげたね、正直。私に直接来たからね、上から。私は坐っていて、グーッと身体が宙に浮いてしまった。帰りの汽車の中で聖書を読むと、まるでベールがとれてしまって、パウロがこんなに聖霊のことを言っていたかと驚いた。

聖霊ぬきのキリスト教はただ

「十字架、十字架」

と言っている。ルターの神学を「十字架の神学」というが——もちろんルターは十字架に土台を置いたけれども——非常に聖霊ですよ。ルターに聖霊が来ていなかったら、あんな翻訳はできやしない。あの力強い翻訳は御霊が来ているからです。

● 知の霊

これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。

と、たたみかけて書いてある。この「智慧聡明」というのは分別のことです。「謀略」はおもんばかりで、「才能」は力です。それから、知の霊——「知識」なんていうより——知の霊です。そして、エホバをおそるるの霊。

そこで、私はさつきから申し上げているのは、ここところに非常に知的なことが、言葉がたくさん出ている。それが霊です。いろんな言い方をしているけれども、中味は一つ。一つで言うなら、さっきのこの「知」という字です。いわゆるあたまの知的判断では絶対ない。そんな世界は本当の宗教の世界に入れない。

自分の知的な理性的な判断、それをしている世界は論理道という。論理の世界です。そういう論理道ではないです、この宗教の世界は。非論理ではないけれども、超論理なんです。いわゆる論理、分別を乗り越えた——分別がわるいと言うのではないですよ——それを乗り越えた世界に入って、全存在でもって感じとるよりか仕方がない。

「つらつら目にて見、耳にて聞き、手にて触りし神の言」

という言葉がああヨハネ書簡にある。それなんです。つらつらこの霊の目で見、霊の耳で聞き、霊の手で触ったような、全存在的な、そういった世界が知なんです。

この知の世界は本当に一如になる。これは一如的な知なんです。雲を見れば雲となり、花を見れば花となり、太陽を見れば太陽となり、何でもその対象と一つになって、内側から見る。内観する。「ないかん」の「かん」の字は、内観とも内感とも、どちらも書くことができる。



内感、内的に感ずる。内観、内的に観る。ゲーテが、

『ゲフュール・イスト・アツレス』(体感することが一切である)

と言った。内感^{からだ}は、今度は体感と言ってもいい。体で感ずる。「からだ」というのは全存在^{からだ}ということ。ゲーテの言っているのは、全存在で感ずる意味の「ゲフュール」です。ゲーテはそこまで解釈してないけれども、私はそう使う。あの「ゲフュール」という字を、

「感情は一切である」

という、「感情」なんて訳したらダメだ。体感が一切であるということ。全存在的にゲーテはものを見、ものを感じていた人です。だから、凄いです。相手は神・大自然で、我と一如の世界です。ゲーテ研究というのは限りなく出ているけれども、さあ中心を本当にかんではいるやつが何人いるかと言いたいくらいだ。

●知と愛とは一つ

そういう知の世界は——知という言葉が非常に躓きになるが——これはホセア書やエレミヤ記をみるとわかる。あのような情感の人がなぜ、知と言っているかということがわかる。ホセア、エレミヤというのは両方とも非常に愛の深い人です。それが「知」という言葉を使っているんだから。なるほど、知と愛とは一つなんだということがわかる。本当にそうなる、これは愛の世界です。

この愛は、

「愛する、愛せられる」

という、能動・受動のもうひとつ奥なんです。愛そのものの世界なんです。この知は、この愛は、主客未分の世界です。これはもう奥義ですよ。対象的に「愛する、愛せられる」なんて言っているのは、まだ本当は手前なんだ。愛そのものの世界です。

藤井先生の『羔羊の婚姻』という詩の中に、

「聖霊は愛そのものである」

という句がある。私はもう「アーメン」と言った。藤井先生も情感の深い方でした。おつかない先生だったけれどもね。ちよつと義が強すぎた。けれども、情感の深い方なんです。なんののかんの言っているけれども、私くらい本当の藤井先生をわかっている人はいない。私は本当に尊敬してますけれども、先生にも限界がある。限界があるから尊敬の度が減るとか、そういうことではない。

あまりでき上がった人というのは、ちよつと困るんだよな——「困る」と言ったらおかしいけれども——キリストを要らなくなるんです、あまりでき上がった人は。それは『随想集』(小池辰雄著作集第六巻)に書いたでしよ、「内村鑑三、矛盾の偉大さ」というのを。であるから、内村先生はキリストでなければならなかった。だから、火花を散らしていた。内村先生の文章になぜ力があるか。それは生まれつきの才能もあるでしょうけれども、そ



んなことでおさまるような世界ではないから。

知とは、いわゆる知に絶しなければ本当の知にならない。絶、学の学という。絶、知の知である。絶、信の信。みんなそうです。これは親鸞の信仰の角度です。親鸞の魂はそういう魂だった。禅宗だって、本当はそうなんですよ、本当の「無」の世界は。そうすると、

「なかなか無になれません」

なんて言う。

「そうじゃない。あるがままで結構だ」

と私は言っている。無は賜るので、自分が無に悟るのではない。あるがままの自分を投げ出してごらんよ、無の世界に入るから。賜るから。相対的人間小池はデタラメなやつかなんだかしらん。けれども、その奥にもう凄い世界が来ているから。

「これはもうありがたくてしょうがない」

と、そう言うだけのはなし。即、無限、無量なものが展開してくるから。そうしたらもう、あなた方は

「そうだ!」

と――誰も言わないね(笑)――心の中では叫んでいていただきたい。

●キリストの霊が臨む

「エホバの霊」が、キリストの霊が――私たちは新約の光で見ます――キリストの霊が臨む。私は根底から十字架でもつてすつかりすつ、飛ばされている。そこには御霊が臨みたくもう。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや、われ生くるにあらず。キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

とは何ですか、パウロは。

「御霊のキリストが、キリストの御霊が、私の中で生きている」

ということ。あのガラテヤ書2章20節をただ、プロテスタントでは金科玉条にしているけれども、それがみんな観念にズレてしまっている。本当かと言いたい。

「パウロと一緒に本当にそこに入っているか」

と。私もながいこと入っていませんでした。聖霊のバプテスマを受けてからははつきりしてきた。

3 かれはエホバを畏るるをもて歓楽とし、また目みるところによりて審判をなさず、耳きくところによりて断定をなさず、4 正義をもて貧しき者をさばぎ、公平をもて国のうちの卑しき者のために断定をなし、その口の杖をもて国をうち、その口唇の氣息をもて悪人をころすべし。5 正義はその腰の帯となり、忠信はその身のおびとならん。

これはテサロニケ後書2章8節に同じような言葉がある。



「その息吹によって相手を倒してしまう」

と、パウロが言っている。アナニヤが偽ったら、あのアナニヤ夫妻がぶったおれてしまったでしょ。あれはペテロのときだ。ペテロもパウロもおそろしいことを御霊の力でやった。まあとにかく、御霊は一つ、賜物はさまざまに働く。学問の世界のうえにも働きますよ、もちろん。何をやっていても、その人の才能がぐんぐん伸ばされていく。だから、教育の根底は、絶対に宗教心がなければダメなんだ。

マルコ伝の後の方にも、

「毒を飲めども死なず」

とある。パウロは毒蛇に咬まれたって、死ななかったではないか。そしたら、土人がびつくりして、

「これは神さまか」

と思って拝もうとしたら、彼は、

「そうじゃないぞ。我も人なり」

と言った。そういう、聖霊の世界がいかに凄い力をいろいろな意味で持っているか。そして、その最大の力は愛として働く。相手を救いあげてしまう、助けあげてしまう。不思議なことが起きる。みなこれは徴、愛の徴です。

「アモール・オムニア・ヴィンキット」(愛は一切に勝つ)

という。ヒルティの好きな言葉です。彼の墓碑銘に書いてある。「一切に勝つ」とは、一切を救いあげる、助けるということ。助ける勝利が本当の勝利だ。相手を倒す勝利ではない。これが新約の世界の聖霊です。

●終末の最後の神の国

だから、ここに不思議なことが書いてあるでしょ。御霊の世界に入ると、

6 おおかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、^{こやし}犢おじし肥たる家畜^{けだもの}ともに居りて、ちいさき童子^{わらべ}にみちびかれ、^{めうし}牝牛と熊とはくいのを^{とも}同じし、熊の子と牛の子とともにふし、獅はうしのごとく藁をくらい、^{ちのみこ}8 乳児は毒蛇のほらにたわむれ、乳ばなれの児は手をまむしの穴にいれん。^{そこな}9 斯てわが聖山^{さきよきやま}のいずこにても害うことなく、傷ることなからん。

ということになる。これは最後の神の国の姿を書いた画家がいる。ルーベンスだ。この聖霊がくると、本当の知の世界に、知の霊、愛の霊がくると、そういう情況になる。だから、このような6節以下のような事態は――普通ならもう噛み殺されたりいろんなことになるが――本当のエホバの知の霊がくると、これが本当に楽しく平和になって、互いに助け合っているような世界になるというから、この知の霊がいかに愛の霊かということがはつきりわかるわけでしょ。知と愛とが一つだと。いわゆる知るの知らないのという、そんな世



界ではないということがわかる。ここに愛という言葉がないから、なおさら面白いんです。まあ、イザヤ書11章のこのたった9節のところにえらいことが書いてある。終末の最後の神の国の事態が。こんなことはただ想像して、おもしろおかしく書いたのではないですよ。霊においてそのような現実を、終末の現実を示されたから書いた。動物にまで及んでいく。むしろ動物は正直ですからね、本能的で。本ものがくると、スーッとそっちの方へ入っていくわけだ。それは一番あとに何と書いてあるかというのと、

そは水の海をおおえるごとく、エホバをしるの知識地にみつければなり。

と書いてある。

「エホバをしるの知識が地にみつると、このような現実になるぞ」

という。だから、この「知」がいわゆる知でないことがはつきりわかる。本当の意味で人を知ることとは審くことではない。その人の欠陥も全部しよって、その人の本当の終末的な姿を見ている人が、本当に知ることです。だから、それは本当の愛の世界です。そういう祈りは相手を助けていく。人を審くような目をしているとダメ。絶対にダメです。

●一如的な知

10 その日エツサイの根たちでもろもろの民の旗となり、もろもろの邦人^{くにびと}はこれに服^{まつ}いたり、栄光はそのとどまる所にあらん。

「エツサイの根」というのはメシヤのことです。エツサイからダビデがあらわれたでしょ。ダビデはメシヤの象徴ですから。

「アブラハムの子、ダビデの子」

というのは、信仰の祖アブラハム、それから本当に膏そそがれたるダビデの裔として、キリストはあらわれた。ダビデはサウルに追いかけてられて、本当は「敵は本能寺」でやつつけることがいくらでもできた。けれども、ダビデは逃げ回っていた。同じ洞穴の中に入ってサウロの衣の裾を切って、

「私はあなたを殺せたのだけれども、そんなことはしません。どうして、この

死んだ犬や一匹の蚤みたいな私をあなたは追いかけて回すのですか」

という有名な言葉があるでしょ。これを聞いてサウロは本当に泣いたという。「お前は本当だった」と。だから、愛は一切に勝つんです。

「エホバを知る」という。エホバと一つの、一如的な知の世界に入る。神さまを、キリストを内観(内感)している世界、体感している世界です。

だから、「祈りなさい」ということは、何かお願いという枝葉のことではない。その中に本当に自分を入れてしまつて一つとなつてごらん。そしたら、枝葉のお願いは知らないまにどこかへ行ってしまう。そうすると、枝葉のお願いは、今度はそこから祈ると、すぐそれが聞かれたり、根底では聞かれる。それはもうはつきりと体験します。



こないだから、私は遠隔祈祷で幾人かの人を助けた。それは自分がその世界に入って、グーツといくと、もう霊的な波動がいくらしいね。肉体はたとえ治されなくても、霊の世界でその人が本当の平安を得ているんです、その人の意識の奥で。それでもうそれは天界へ必ず行く。人間の寿命には限界があるからね。

¹³またエフライムの猜^{そねみ}はうせ、ユダを悩ますものは断たれ、エフライムはユダをそねまず、ユダはエフライムを悩ますことなかるべし。

そういつた嫉^{そね}みだの妬^{ねた}みだの争いだの、そんなものはみんななくなってしまう。人間はすぐ相対的なことを問題にして、ああだこうだと言っているね。ダメだよ、いつまでたつても、そんなことをしていたのでは。キリスト者になつて、集会をいい加減にしていると、どういうことになるか知りませんよ。

¹⁶斯てその民ののこれる僅かのものの為にアツスリヤより来るべき一つの大路あり。昔イスラエルがエジプトの地よりいでし時のごとくなるべし。

素晴らしいことが書いてある。預言者は高所からちゃんと救いの現実を見、審判の場を見て、ものを言ってます。そして、最後には第二イザヤみたいに、贖いの世界に来てしまうんだ。

●主エホバはわが力わが歌なり 第12章に入ります。

¹その日なんじ言わん。エホバよ我なんじに感謝すべし。汝さきに我をいかり給いしかどその怒りはやみて我をなぐさめたまえり。²視よ神はわが救いなり。われ依頼^{よりのみ}ておおるるところなし。主エホバはわが力わが歌なり。エホバは亦わが救いとなりたまえりと。³此故になんじら欣喜^{よろこび}をもて救いの井より水をくむべし。

これは素晴らしい句です。これは出エジプト記にまず出てくる。出エジプト記15章、まさにモーセの出エジプトのところからです。

「¹是に於てモーセおよびイスラエルの子孫この歌をエホバに謡^{うた}う。云く、我エホバを歌い頌^{ほめ}ん。彼は高らかに高くいますなり。彼は馬とその乗手を海になげうちたまえり。²わが力わが歌はエホバなり。彼はわが救^{すくい}拯となりたまえり。」(出エ15・1、2)

と。この言葉がそのまま出ている。それからもうひとつ、詩篇118篇14節の言葉です。

「¹⁴エホバはわが力わが歌にしてわが救いとなりたまえり。」(詩篇118・14)

そういう力なり歌なり。もう歌わざるをえないと。

ルターもよく讚美歌を作つては歌つて、サタンをやっつけていた。

「小さな言葉が彼を倒す」

という。「彼」とはサタンのことです。「十字架」とか、「キリスト」とか、そういう小さな



一つの言葉を唱えようと、サタンは逃げていく。サタンはキリストが恐い。それを体験しているから、ルターはそう言っているんだ。

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

たとえば、虎がすくんでしまうという。

アッシジのフランシスなんかは狼を手なずけてしまったものな。狼が来て人を食ってしようがないから、フランシスは出かけて行って、

「狼さん、狼さん、私はこれからちゃんと食べ物を与えるから、街を荒らさないでくれ」

と。狼はちゃんとなついてしまうものだから大変なもんだ。フランシスなんては、始めはなかなかデタラメな青年の面もあったんだけど。みんなそうですよ、アウグスチヌスだって。もう救われると、みんな次元がちがう、質が変わってしまう。

パウロだってそうだよ。パウロがなぜ

「罪びとの首」^{かしら}

かというと、人殺しをやったからね。キリストを信する者を迫害した。

「本当に悪かった」

と。けれども、今度は最大の証者になった。ダビデも悪いことをした。けれども、彼はまたメシヤの型とされるくらいだみんな、万人はこれ罪びと。ただ本当にキリストを受けて、ひっくり返るか。日に日に自分を乗り越えて進んでいくか。人の悪をいつまでも思っている人はかえって自分がおかしくなる。どんどん乗り越えて進んで行く。私は過去の一切のプラスもマイナスも本当の意味で全部プラスにする秘訣を知っている――「知っている」と言っではおかしいが――自分で体験しています。ありがたいです。

●キリストは無限無量

そういう、「主エホバはわが力わが歌なり」ということ。そして、4節からまた、

4 その日なんじらいわん。エホバに感謝せよ、その名^{みな}をよべ、その行為^{みわざ}をもろもろの民の中につたえよ、その名^{みな}のあがむべきことを語りつげよと。5 エホバを頌^ほめうたえ。そのみわざは高くすぐれたればなり。これを全地につたえよ。6 シオンに住めるものよ、声をあげてよばわれ、イスラエルの聖者はなんじの中にて大いなればなり。

と。この「イスラエルの聖者」として今度は、霊的イスラエルの聖者はキリストです。これは私たちの中で絶大であります。キリストは絶大であります。

「キリストはかくかくでいゝもの」

なんて書けるものではないですよ、キリストというひとは。だから、無限無量だと言う。そういう言い方をしないらしいね、キリスト教会では。



「キリストは無限無量だ」

なんて。ただ「愛なり」とか何とか言っている。ひとつの言葉に限定してしまっている。

それは「愛」という言葉は、言葉のうちでは最大の言葉です。パウロも言っているとお
り。孔子は「仁」といい、お釈迦さんの世界は「慈悲」であり、キリスト教は「愛」であ
る。もうとにかく、至りつくところは、人間が一番求めているものは実は、仁であり、慈
悲であり、愛であるんです。それがなかったら、人間の生命はないんだよ。生命より大事
なのは無限無量の愛なんです。愛のない生命をいくら永く生きたってしょうがない。だから
その愛は、愛に生きる人は既に一日において永遠を生きている人だ。永遠の質を持っている。
永遠というのは、いつまでもたつても滅びないことを永遠という。

もう地上と天上は一つですからね。私は天界の兄貴がいよいよ近い。ありがたいです。まあ
27歳で、非常に課題を本当に担っていた男なんだけれども、それが仆れてしまったから。
私が弔い、合戦をしないではいられない。株から芽が出たわけだ。

●根っこから芽

それで最後に、キリストは私たちの根っこであります。そこから私たちが、芽が吹く。
このキリストという根っこから芽が吹いて、その芽は皆さん一人ひとりいろんな芽が吹く。
我々はそのようにして、幹が生じ、枝が生じ、葉っぱが出て、花が咲いて、最後に果が実る。
だから、実を結ばんと。キリストをいただいて、果を結ばないようなキリストチャンは、そ
んなキリストチャンはキリストチャンではない。実を結ばなくては。ただ

「私はキリスト教を信じています」

なんて、ダメだよ、そんなのは。その人らしい実が稔ってくる。

その人らしい果を実らせるのが本当の教育だ。もう入学試験なんて止めたらいいいね、本
当は。全部、くじにしてみました。果を結ばないやつは途中から出してしまう、勉強をい
い加減にしているやつは。そして、くじから外れたやつは今度また入れてやる。まあそれ
くらいにしているのではないかな。今度は、『随筆集』にいろんなことを書くかと思っている。
この根っこは、キリストという根っこは枯れませんか。いくら日照りがあるうと、
どんな洪水があっても。そして、キリストは

「我はまことの葡萄の樹、汝らは枝なり」

というから、今度は、

「我は根っこなり。汝らは芽生えなり」

ということ。キリストは神さまを根っことして、その芽生えなんだよ、キリストは。キリ
ストは神さまを根っことしてその芽生えで、これにもの凄い花が咲き果が実ってしまった。
最後には新天新地でもって百花繚乱になる。

